
絶望ばかりの世の中だけど

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望ばかりの世の中だけど

【Nコード】

N2650B

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

人生に絶望した私は、自殺をしようとしたビルの屋上で、彼に出会う……。

（前書き）

この作品における主張は全て猫小判の勝手な思い込みですので、それを念頭に置いて読んでください。気分が沈みやすい方にはお勧め出来ません。

人生ってというのは、辛くて、苦しくて、絶望的なもんだ。

誰だって、それこそ政治家の馬鹿な御曹司やら、頭の無いどつかの大企業の社長の一人息子でさえ、辛いし、苦しいし、絶望……は味わってないか。

とにかく、生きるってことはそれなりに辛くて苦しくて、やってられないようなものさ。

それだって言うのに、人生に絶望したやら、生きるのが辛いやら苦しいやらで簡単に自殺する奴が多すぎる。

何度も言うが、そんなことは当たり前のことなんだ。人生、辛くも苦しくも無い奴は、それは生きてるんじゃない。生かされてるんだ。そこそこ、間違えんなよ。

それにな、簡単に自殺なんてしていいものじゃない。身内や友人が悲しむってのは些細ごとだが、それより、他人に迷惑がかかる。

飛び降り自殺だと、自分の死体が街中に晒されるわけだ。てことは、不特定多数の人間の目に入ることになる。見た人間は、恐らくみんな沈んだ気分になるだろ。

身内と友人はいいんだ。悲しんでる奴は、悲しみたいから悲しんでるんだから。でも他人は違う。見たくもないのに偶然に死体を見て、気分を悪くする。そういう迷惑はかけちゃいけないと思う。

それに、死ぬってことは自分が無くなるってことだ。宗教じゃ、死後の世界があるのかなんとか言ってるが、そんなもんあるわけねえ。死んだら終わりだ。

てことは、辛さも苦しさも絶望も感じなくなる。何も感じられないんだ。それが一番怖いと思わないか？

今、こうやって人生に絶望してるわけだが、それを感じられるだけ、考えられるだけ幸せだろ。

それに陳腐な言葉だが、生きてりゃいつかいいことがあるだろ。

他人から見ればくそつたれなもんなのかも知れないが、自分にとつて嬉しいこと、楽しいことが生きてりや必ずある。それを信じて生きてみないか？

親に暴力を振るわれたのか、クラスメートにいじめられたのか、先生にいびられたのかは知らんが、そんなことを全部ぶつ飛ばすような幸せなことがあるからよ。

そう私に説教した彼は、説教はこれで終わりとはばかりに煙草に火をつけた。私は、目の前に広がる毒々しいイルミネーションをゆっくりと見回す。

ごう、と風が吹き抜けた。

あれ、難しかった？

彼は焦ったように私の方に顔を向ける。その慌てた様子なんだから可笑しくて、私は声を上げて笑い出した。

そんなに笑うこと無いだろーよお。

彼はそう言つて、ふてくされたように遙か地上に視線をやって煙草をふかす。私がおめん、と謝ると、彼は下を向いたまま大きく煙を吐いた。

まあ、いいや。俺も説教とか言いながら、言いたいこと言っただけだしな。

彼は自嘲気味に笑つて、煙草の火ををコンクリートに押し付けた。私はぶんぶんと首を横に振る。良い説教だったよ、と。

彼は私の顔をまじまじと見詰めて、純粋な笑みを浮かべた。空虚で明るいように飾った、それだけのシンプルな笑み。私もつられて、

ぎこちないながらも笑顔になる。

そりゃ良かった。嘘でもそう言ってもらえると、俺にも生まれた意味があるってもんだ。

彼はそう言っつて、よいしょ、と立ち上がり下を見る。私も同じように下を見た。何も考えず生きる働き蟻のような人間の群が目に入った。

彼がその群の真ん中に墜落する前に、私は疑問を口にした。どうなったら死んでもいいの、と。あなたは どうして死ぬの、と。

彼は暗い、暗い笑みを私に向ける。

人が自ら死んでいいのはな、疲れた時。絶望して、また絶望して、生きるエネルギーを無くした時だ。

私は意味が良く分からなかった。でも、漠然と理解した。彼は今、命を絶つのだと。

彼は、

君も生きることには疲れたらこっちに来るといい。俺は待つてはいないだろうがな。それじゃ、またな。

明日また出会う友人にそうするように手を振って、宙に身を躍らせた。

私は彼の行方を見ることなく、ゆっくりと立ち上がる。

また、ね。

そうして私は、彼とは逆の方に向かって確固とした足取りで歩く。

彼ほどに疲れていない私は、もう少し絶望を味わってみようか、
そう思った。

(後書き)

最初の構想では、『私』の絶望の理由、『彼』の疲れた理由、後日談を書く予定でした。ただ、そうなるが一番主張したいことが薄れてしまう可能性が高く、余韻をぶち壊してしまうと思ったので、小説の一番いいところを抜き出したような形になりました。後日談がどうしても読みたい、自殺に至る理由が知りたいという方はメッセージ等を下さい。反響によっては別作品として、新しく書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2650b/>

絶望ばかりの世の中だけど

2010年10月8日13時05分発行